YoungAdult News

2018 AUTUMN Vol.68

～ヤングアダルトとは、12～18 歳くらいのみなさんのことです～

テーマ　＃小説の一行目。

小説の書き出しの一文には人をひきつける美しい言葉、心をつかまれるひと言、インパクトのある言いまわしなど、作家のこだわりが込められています。今号は、図書館員がひきつけられた小説の一行目とその作品について紹介します。

「ぼくはヘンだって自覚したのは、火曜日だった。」

十月のある火曜日、主人公のダニエルに運命のときがやってくるのでした。同級生のサラとの出会いが！

勉強は得意だけど、部活のアメフト部では控え選手兼給水係。寝る前にはいつも九つの儀式を行わないと寝られないし、失敗したら最初からやり直し。不吉な数字は書けないし、急に襲ってくる恐怖と対峙する日々。誰にも言えずに懸命に〝普通〟を装う十三歳のダニエルは、サラと出会い、自分が「ＯＣＤ（オーシーディー）＝強迫性障がい」であることに気づきます。

この物語は、作者自身の経験をもとに書かれています。作者も「ＯＣＤ」に苦しんだ方です。誰にも話せず、ひとりで恐怖とたたかってきた作者からのエールがこめられた作品です。障がいの有無に限らず、人生では様々な問題や悩みにぶつかります。そんな時に、誰かに打ち明けることが乗り越えるための大切な第一歩だというメッセージが込められています。

『ぼくはＯ・Ｃ・ダニエル』
ウェスリー・キング／作　大西　昧／訳　すずき出版

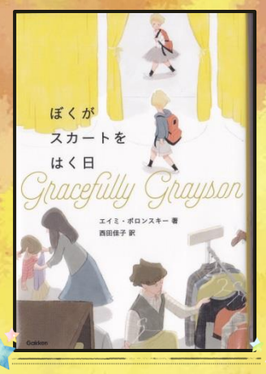
新着図書の紹介

『学校に行きたくない君へ』
全国不登校新聞社／編　ポプラ社

不登校専門紙である「不登校新聞」に掲載されたインタビュー記事から、人生の先輩二十名の深い人生観を抜粋。大人になった不登校やひきこもり経験者が過去を振り返り、自らの過去を語る言葉には説得力があります。〝学校の外〟にも魅力的な世界があることを教えてくれます。

『ぼくがスカートをはく日』
エイミ・ポロンスキー／著　西田　佳子／訳　学研プラス

主人公のグレイソンは、十二歳。男の子の体で生まれてきたけれど、女の子になりたい、自分らしく生きたいと願っていました。ある日、学校で演劇のオーディションが開催され、グレイソンは勇気を出して女神の役を受けるのでした。自分らしく生きることと周囲の反応との葛藤が描かれています。自分らしく一歩を踏み出したグレイソンを応援したくなる一冊。



『心に風が吹いてくる　青春文学アンソロジー』
高山　実佐・東　直子・千葉　聡／編　三省堂

「青春」と呼ばれる世界を生きる中高生が描かれている小説やエッセイ、短歌などの文学作品が紹介されています。生きることに不器用で悩み多き青春期におすすめする、魅力的な読書案内本。小説は部分的に掲載されているので、色々味わってみてはいかがでしょうか。

長岡市立地域図書館（７館）

互尊文庫　〒940-0065 坂之上町 3-1-20 TEL35-7981 FAX35-7982
西地域図書館　〒940-2105 緑町 3-55-41 TEL27-4900 FAX27-4901
南地域図書館　〒940-1103 曲新町 566-7 TEL30-3501 FAX30-3505
北地域図書館　〒940-0876 新保町 1399-3 TEL22-7100 FAX22-7105
中之島地域図書館　〒954-0124 中之島 3807-3 中之島文化センター内 TEL61-2165 FAX66-1003
寺泊地域図書館　〒940-2502 寺泊磯町 7411-14 寺泊文化センター内 TEL75-5159 FAX75-3109
栃尾地域図書館　〒940-0222 中央公園 1-36 栃尾文化センター内 TEL53-3005 FAX86-5868
メールアドレス　lib.kita@nscs-net.ne.jp
図書館ホームページ　https://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp
★お問い合わせは北地域図書館へ

編集・発行／指定管理者　株式会社図書館流通センター（TRC）

長岡市立図書館 100th
平成30年は図書館開館100周年
あなたのそばにいつも図書館

「小説の一行目。」

「気がついたとき、熊は頭をおさえてすわっていた。」

気がついたら記憶を失っていた熊は、誰かを愛していたことだけは覚えていました。その誰か―「レディベア」を探しに旅をします。風変わりな動物たちとの出会いを通して熊は自分の人生について考えます。

この本は愛情、友情など“感情”にまつわる動物寓話集です。普段の生活の中で見落としがちな感情についてゆっくり考えさせてくれます。動物たちと一緒に人生の哲学を考えてみませんか。

『頭のうちどころが悪かった熊の話』安東　みきえ／作　理論社

「ごはんからココナッツのにおいがしない。」

皆さんはごはんのにおいを気にしたことはありますか？

マレーシアからの帰国子女、沙弥は日本の中学に順応しようと奮闘します。ある日、先輩から呼び出され急に吟行（詩歌を詠むために出かけること）に行くことに。沙弥はとまどいながらもマレーシア語を取り入れた短歌を作り始め、徐々にその魅力に取りつかれます。短歌という日本の文化に触れるなかで仲間と打ち解け、やがて自分らしさを取り戻していく…。そんな物語です。

『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ』こまつ　あやこ／著　講談社

「5、というのは、とても不安定な数字だ。」

このお話の主人公は、内気な中学二年生・二葉絆。ある日絆のクラスに転校生・昭島こころがやってきて、クラスメートを前に「この学校で友達を作るつもりはありません」と宣言します。常に周囲に合わせることで居場所を作ってきた絆は、自分とは対照的なこころに興味を持ち、やがて「友達になりたい」と願うように。しかし自分といると迷惑がかかるからと、絆の思いを頑なに拒むこころ。彼女の秘密とは、そして予期せぬ事態に巻き込まれていく絆の運命は…？驚きの展開に、思わず惹き込まれます。

『こころ　不思議な転校生』七瀬　晶／著　KADOKAWA

「すべてのはじまりはキャベツだ。」

題名と小説の一行目からはどんなお話か想像がつかないかもしれませんが、大学生の兄と高校生の妹のお話です。日々家族のために食事を作り、洗濯物を干し、掃除などの家事をこなす兄（妹曰く地味でつまらない男）が、ある日妹の友達に恋をします。恋の始まりは、なんとキャベツ！恋の相手とのデートは上手くいったように思えましたが、何やら問題があるようで…。兄と妹、家族と恋とキャベツのちょっと切ない物語です。

『キャベツ』石井　睦美／著　講談社

「毎日毎日、朝起きるたびに新しい日というものはやってくるわけだけど、今日はその中でもとくべつ重要な一日である。」

平凡だけど強い意気込みを感じさせる文章で始まるこの小説の主人公は、廃部寸前のなぎなた部員。廃部を免れるため部員集めに奮闘したり、風変わりな先輩に振り回されたりしながらも、周りの助けによって少しずつ成長していきます。ひたむきに頑張る主人公の姿に元気を貰える一冊です。

『おとめの流儀。』小嶋　陽太郎／著　ポプラ社

「誰かと誰かが、つきあっているらしい。」

高校一年の夏休みが終わり、周りに急にカップルが増えたことに焦り出した男の子、九條潤。イケメンで、かつ「女の子には優しく」がモットーの彼は学校の人気者。でも彼女はまだいない。一方、なるべく目立たないように生活している地味な女の子、八王子あや。見た目も性格も正反対の2人が文化祭の準備をきっかけに、お互いの事を知っていきます。

果たして、九條に人生初の彼女ができるのか？人に知られたくない秘密を抱えながらも、自分の殻を少しずつ破っていく二人を応援したくなります。

『ふたりの文化祭』藤野　恵美／著　KADOKAWA